繪本西遊記

上

水島爾保布畫

Y17
2949

繪本西遊記 上

水島爾保布
文・弓館芳夫

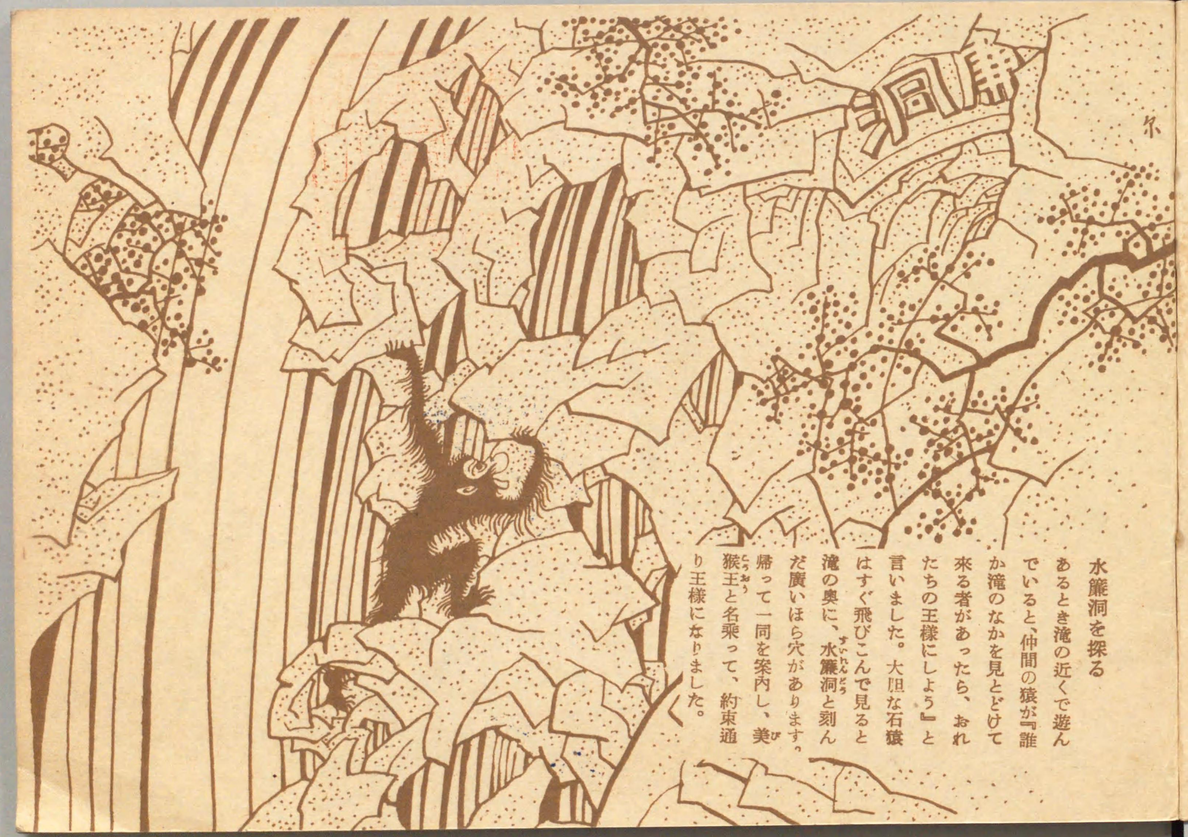
Y17
2949

国立国会
30.3.22
図書館

孫悟空出生

ある日のこと、傲來國の華果山の上で、シューッポンと花火のような音がしたと思うと、大きな石が割れて、中からお猿さんが生れました。これが後日の孫悟空で、生れつきのきかん坊。遊び仲間の餓鬼大将でいばっていました。

簡
5068



水簾洞を探る

あるとき滝の近くで遊んでいると、仲間の猿が『誰か滝のなかを見とどけて來る者があったら、おれたちの王様にしよう』と言いました。大胆な石猿はすぐ飛びこんで見ると滝の奥に、水簾洞と刻んだ廣いほら穴があります。帰って一同を案内し、美猴王と名乗って、約束通り王様になりました。

老仙人の弟子となる

だんだん智恵づいて来た美猴王は、不老長生の術を学ぼうと思い立ち、筏に乗って西牛賀州に渡り、老仙人須菩提祖師のところに入門して、初めて孫悟空という名をもらいました。なにしろ利口者なので六、七年の間に不老長生の術ばかりでなく、七十二種類の忍術、変身術を習いおぼえたのですから、えらいもんです。

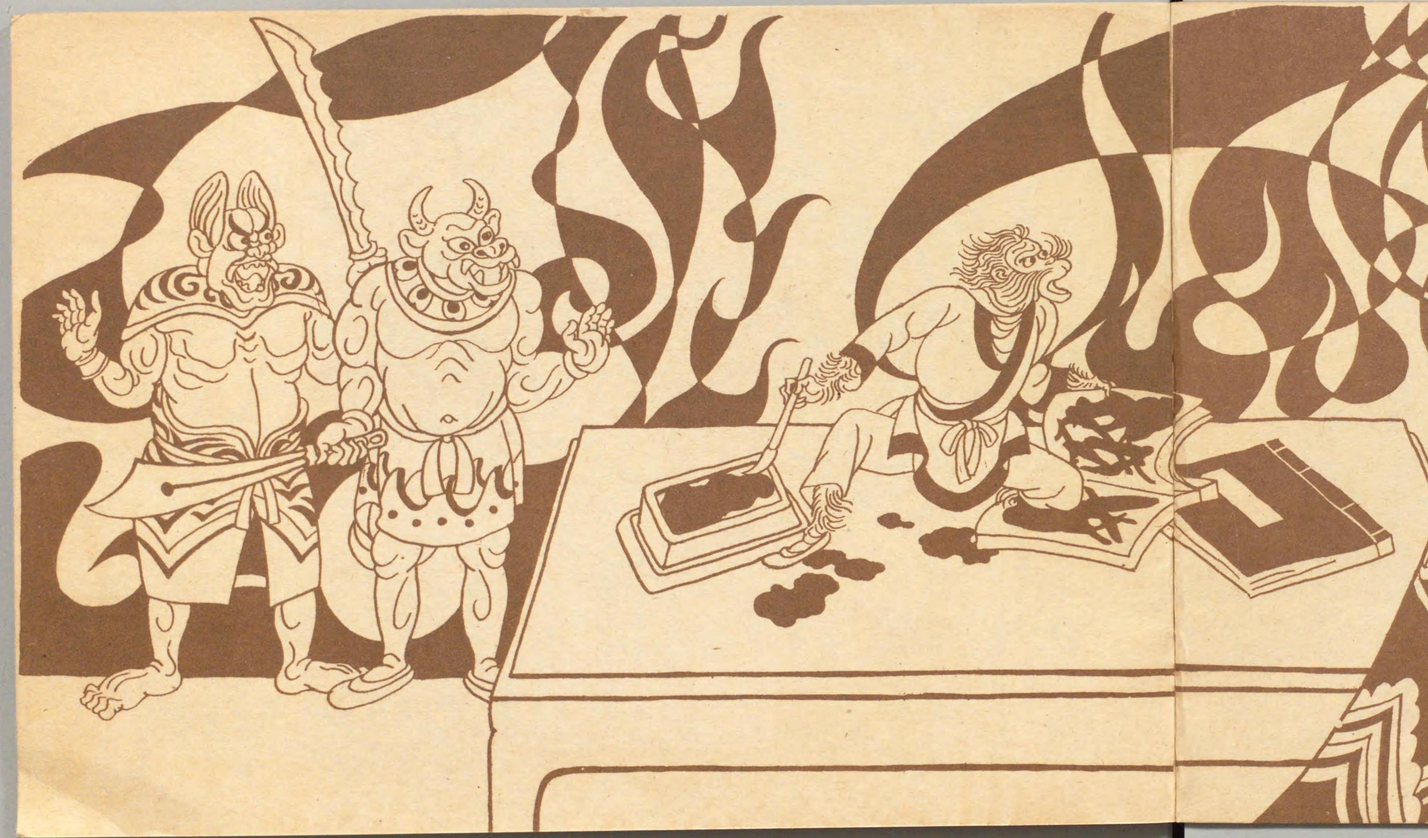
觔斗雲の秘法

悟空は自分で空中飛行法を考え出し、得意になって練習していると、老先生はこれを見て『お前のは雲の中を這うのだ。よし、わしが觔斗雲の術を授けてやろう』と教えてくれたのが、一時間に十万八千里を飛ぶことが出来る大秘術です。

如意棒を奪う

卒業して故郷の華果山に帰ると、山は近所の混世魔王に攻め荒され、落城が目前に迫っています。憤慨した悟空は、身外身の術を使って奮戦し、たやすく撃退しました。

しかし武器のないのがなにぶんにも不便です。そこで潜水の法を使い東海龍王を訪ねてその武器庫に行ってみると、如意金箍棒重さ二万三千五百斤と銘打った鉄棒がある。『これは見事なものだが、チト長すぎる』と言うが早いか、スルスル縮まって縫針ほどになった。『なるほど便利しごく、ちょうだいして行きますぜ』とサッサと持って帰りました。

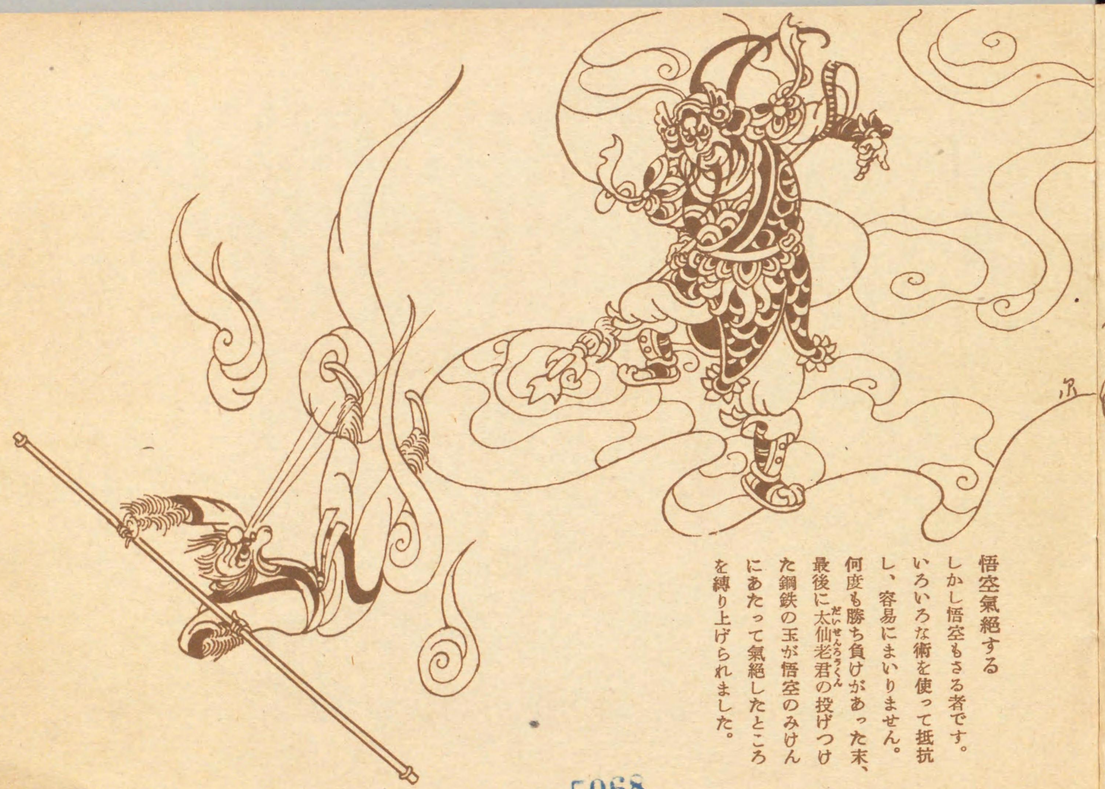


閻魔帳をぬり消す

ある日うたたねをしていると、青鬼と赤鬼が來て悟空を縛り上げ閻魔の庭につれて行きました。悟空はカンカンに怒って、ウンと力んで繩をたち切るやいなや、耳の中から取出した如意棒を一丈余りにのばして鬼どもをたたき伏せ、大王の前に躍りこんだ。『ヤイ閻魔、不老長生のオレを何でここに呼寄せたのだ』『まあまあお靜かに——おおかた人違いかも知れませんから……』『そんなら閻魔帳を見せろ』と帳面を出させて見ると、その中に「石猿孫悟空三百四十二才」と書いてある。悟空はそれを黒ぐろと塗り消して、ゆうゆうと引上げたと思ったら、これは一場の夢でした。

帝室の桃園を荒す

兵器をうばったり、闘魔帳を消したり、乱暴が過ぎるので、天上界ではなだめる方法として帝室御用の桃園の監督にしました。ところがその桃が不老長寿の実と聞いて、ある日、さんざん喰荒した上、宴会場の酒のさかなまで失敬して、古巣の華果山に逃げたので、天界では、総動員で、悟空征伐をすることになりました。



悟空氣絶する

しかし悟空もさる者です。いろいろな術を使って抵抗し、容易にまいりません。何度も勝ち負けがあった末、最後に太仙老君（たいせんろうくん）の投げつけた鋼鉄の玉が悟空のみけんにあたって氣絶したところを縛り上げられました。

5068

お釈迦様の五指

天上界では、首斬り、火あぶりといろいろやって見たが、悟空は術でまぬがれて平氣の平左です。そこへお釈迦様がおいでになった。

『お前はわしの手の中から飛出せるかね』

『何のこれしきのことを！』と手の上に飛び上ってから、觔斗雲の術で八、九万里飛んで行くと、肉色をした五本の柱があります。

五行山に幽閉さる

悟空は真中の柱に「大聖ここに一遊す」と書いて、大得意で帰って來ると『ハハハハ、お前はわしの手の中を往復しただけじゃ』といって、開いて見せた釈迦の指にまさしく自分の書いた文字があります。

驚いて逃げだそうとすると、釈迦は五本の指を五行山という山にかえて、悟空をその中にとじこめてしまいました。

三藏法師に出会う

光陰矢の如くそれから五、六百年たった貞觀十三年、唐の高僧三藏法師が太宗皇帝の命によって、天竺（印度）へ經文をもらいに行くことになり、五行山にさしかかりました。するとふもとの方で、ウーンウーンとすごい唸り声が聞えます。近寄って見ると猿公が大きな岩と岩の間にとじこめられているのです。

禁錮を解かれる

『和尚様、天竺へおいでになるのではございませんか。お供させていただければ、私の罪ほろぼしになります。どうか救出して下さいませ』と悟空はたのみます。

三藏はその言うとおり、はってあったふだをはぎ取ると、ボーンと石が割れて飛出した悟空は『お蔭様で満期になりました。これからは和尚様をお守りしてまいります』といって、馬をひいて西に向いました。

退治した虎の皮

時はすでに冬の初めで、ろくな着物を持たない悟空は寒くてたまりません。ブルブルふるえながら歩いていると、突然一匹の大虎が現われました。悟空は大喜び、ひさしぶりに耳の中から取出した如意棒で、一打ちにたたき殺し、皮をはいだかと思うと、こんどは如意棒を縫針にちぢめ、ももひきに縫上げて、着こみました。三蔵はあっけにとられて見ております。

山賊をみな殺し

数日後、枯野の中で六人の山賊に道をふさがれました。『ナイ、身ぐるみ脱いで置いて行けっ』『何をっ、てめえたちこそおれに献納しろ』と言うが早いかボカヲボカリなぐり殺し中からよさそうな上着をはぎ取り、これで冬じたくができたわいと大にこにこです。

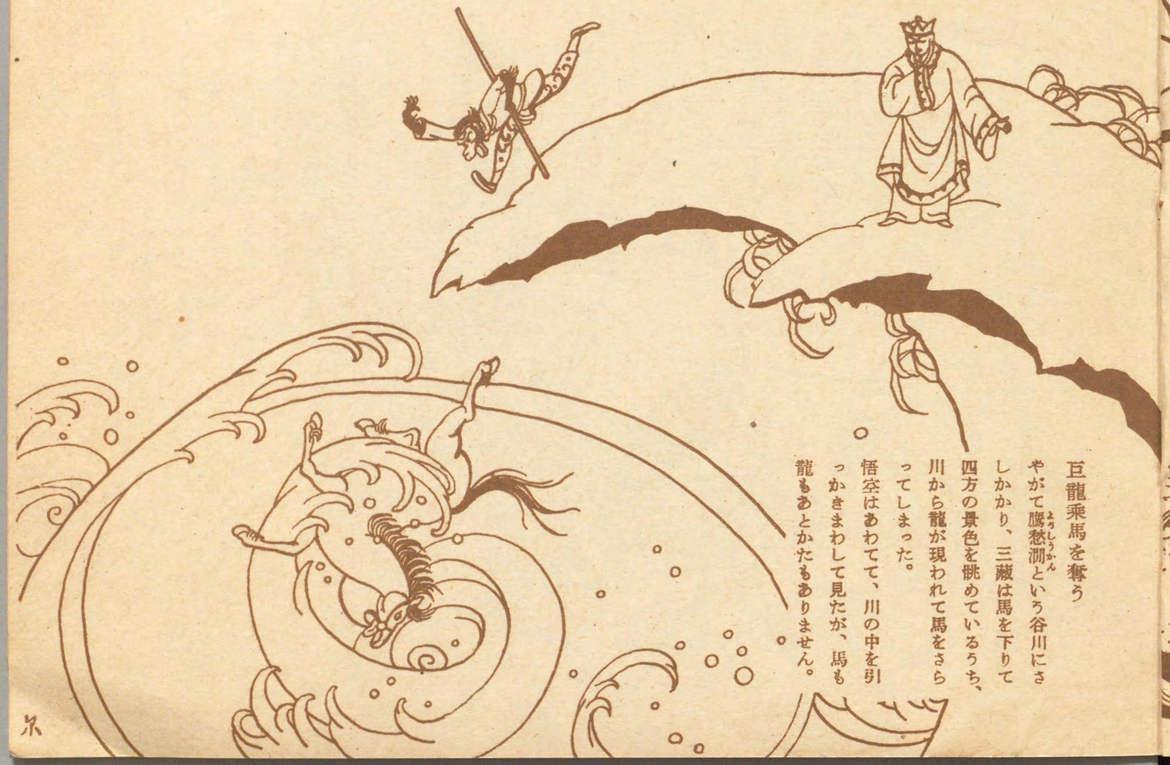
こらしめの緊箍呪

ところが、三蔵のどきげんはたいへん悪い。

『いかに悪者でも殺すのは佛の道でないぞ』

『チェッ、だって殺さなけりゃ、あなたが殺されますぜ』と、口答えすると、三蔵の眉がピリッと動き、口の中で何やら呪文を唱えた。

すると悟空は頭をかかえて七轉八倒の苦しみよう。これは言うことを聞かぬとき、こらしめのため、頭にはめさせて置いた金輪の緊箍呪というやつなのです。



亘龍乗馬を奪う

やがて鷹愁澗という谷川にさしかかり、三蔵は馬を下りて四方の景色を眺めているうち、川から龍が現われて馬をさらってしまった。

悟空はあわてて、川の中を引っかきまわして見たが、馬も龍もあとかたもありません。

龍を白馬に化す

近所の氏神を呼んで、龍のすじょうを聞くと、観世音菩薩が放していったものだという話。悟空が談判に出かけようとしたとき、観音が現われ『あれは三蔵の乗るように待たせて置いたのだ』とて龍を呼寄せ柳の枝で背中を撫でると、たくましい白馬とかわりました。

観音禪院の火事

多が過ぎて春二月、観音禪院という寺に、一夜の宿を求めましたが、住職が三蔵の錦襴の袈裟を奪おうと欲を起しお堂に火をつけました。悟空は神通力でこれを見破り、火を住職のいる方丈に吹き付けて『ざまあみやがれ』と高見の見物。

黒風大王まいる

禪院の火事見舞に來た黒風大王という惡もの、どさくさまぎれに袈裟をかっぱらって行ってどうしても返してくれません。困った悟空は觀音樣を呼んでお願いし、自分はみやげ物のお菓子に化け、胃袋の中に飛込んで暴れたので黒風大王はころげまわって苦しみ、おそれいって觀音樣に平あやまりにあやまった上、盜んだ袈裟を返しました。

猪八戒

十日ばかりして、烏斯藏國の金持高太公の家に一泊すると、三年前から豚そっくりの押かけむこが入り込み、一家中弱り切っています。そこで悟空は娘の姿に變じ、しなだれかかる豚むこをこっぴどくこらしました。

豚君は改心して三藏の弟子になり、猪八戒という法名をもらい、お供をすることになります。

虎の精

師弟三人は旅路を重ねて黄風嶺にさしかかったとき、現われ出たのは虎先鋒といふ虎の精。八戒熊手をふるって、奮戦したので虎先鋒はすたこら逃げ出します。

ところがこれは計略で、二人が追かける途中忍術を使って本身は三蔵のもとへもどり、三蔵を一つかみにさらって行きました。

毒氣にあたって失明

それと知った二人はあわてて、山中を探しまわっているうち、ほら穴の中で虎先鋒と親分の黄風魔王が、三蔵をどう料理しようかと相談しています。悟空矢庭に躍りかかったが、魔王もさるもの、口を開いてフーッと息を吹きかけると、毒氣にあたって眼をあけていられません。

眼病の妙薬

にわかめくらの悟空は、八戒に手を引かれてすごすご山を下り、一軒の民家に一夜の宿を求めました。

一行の話を聞いた老主人は『それはお氣の毒、幸い妙薬がありますから……』といって、やすむ前に眼にさしてくれましたが、眼がさめてみるとけろりとなおっています。老主人は観音様がかりに姿を現わしたものでしたが、もうそこにはいませんでした。

黄風魔王の正体

よく朝二人は、魔王界のお目付役靈吉菩薩に願って、黄風洞へ同行していただきます。

魔王は悟空を見て『猿め、又來たな』と、毒ガスを吐こうとした時、菩薩が飛龍宝杖を投付けると、たちまち金色の龍に変って魔王をとらえました。本体に返ったのを見れば、ちっぽけなねずみです。こうして三藏は救出されました。

水中から大入道

秋の始めごろ、流沙河と呼ぶ大きな河に来かかると、波の中からしゃれこうべの首かざりを着けたどんぐり眼の大入道が現われ、半月の槍をふるって突きかかりました。悟空と八戒はこれをむかえうちましたが、入道はあぶなくなると、水中にもぐってしまうので手に負えません。

一行の顔ぶれ揃う

悟空は例によって観音様の智恵を借りるために、南海普陀落迦山を訪れると『あの入道は沙悟浄と申し、三蔵の供をするよう待たせて置いた者じゃ、これ木叉そちがいっしょに行ってよきよう取計らってまいれ』といってひょうたんを貸して下さいました。

木叉は流沙河に行って、悟浄を呼び出し、事のわけを話して聞かせると、三蔵に無礼をわびて入門を願いました。そこで木叉はひょうたんに悟浄の首飾を結んで渡し舟にし、空中から守りながら一行を向う岸に安着させました。

これで主命を果したので、ひょうたんを取戻すと、そのとき九つの鬼火が燃上り、しゃれこうべが消え失せたのは悟浄の罪業が軽くなったしるしでしょう。

Y17-2949
1200600480731

發行所　東京都港區西芝浦三ノ二一　株式會社　トツパン

25 3.25